

# 文学館だより

令和 6年 1月 1日  
若山牧水記念文学館  
TEL 0982-68-9511  
文責 日高 第93号

あけましておめでとうございます

昨年は、第73回牧水祭【牧水没後95年】をはじめ、企画展「伊藤一彦展」に多くの方々にお越しいただきました。ありがとうございました。  
牧水先生を慕い、牧水生誕の地に誇りをもち、  
今年も全国へ牧水先生の魅力を発信してまいります。  
よろしくお願ひいたします。



## 牧水没後95年特別企画 「若き牧水から現代へのメッセージ」

先月、『文学館だより 12月号（第92号）』において、狩峰隆希著「どこから来てどこへ行くのか 一若き牧水の歌」を掲載しました。紙面の都合上、無断で改稿したものを掲載してしまいました。改めて、ここに寄稿いただいた文章を掲載いたします。

どこから来てどこへ行くのか 一若き牧水の歌

かりみねりゅうき  
狩峰 隆希

私は高校時代、牧水・短歌甲子園出場をきっかけに牧水と出会い、そこで牧水の存在の大きさを目のあたりにしました。県内で開催された牧水のイベントにも何度か足を運んでおり、その中には伊藤一彦先生が登壇されているものもありました。そんな私ですが、じつはこれまで牧水の歌を面と向かって読んだことはなかった。近代歌人でいうと、斎藤茂吉や佐藤佐太郎などの写実主義を好んで読んでいました。茂吉や佐太郎は私の周りの若い世代でも人気で、技巧的な部分が注目されている印象があります。それに比べると、牧水は人柄や歌柄については語られるけれど、技巧といった部分は注目されていない。しかし今回初期作品を読んで思ったのは、牧水にも技巧の面で注目するところはあるということ。ここを深堀りしていきたい。また明治にデビューした近代歌人は、和歌的な制約の強かった頃から徐々に自分のスタイルを築いていくことになるのですが、牧水の場合はどのような過程を辿っていったのか。個人的にそういったところに興味をもっています。

〈当日の資料より抜粋〉

おもひやるかのうす青き峠のおくにわれのうまれし朝のさびしさ  
生くといふ否むべからぬちからよりのがれて恋にすがらむとしき  
はつとしてわれに返れば満目の冬草山をわが歩み居り

『海の聲』

『独り歌へる』

『路上』

「われのうまれし朝のさびしさ」とは何なのか。立ち止まって考えさせられる表現です。私は、自分がこの世に生をうけたことのさびしさ、つまり人間の原初的なさびしさを訴えかけているのではないかと読みました。上句は地名などの固有名詞を用いず、和語のやわらかなしらべで描写しており、まさに自然界から産み落とされたような感じがします。次の歌は、「生く（生きること）」とは「否むべからぬ（拒否できない）ちから」をもつという見方にはっとさせられます。それに逃れて恋をしたこと也有ったという歌ですが、一見後ろ向きのようで、かえって生きることへの強いエネルギーを感じさせる。牧水の絶対的な生の肯定感が裏打ちされているように思います。

「はつとしてわれに返る」と、見渡す限りの冬の草山のなかを歩いているところだった。浅間山を旅した折の歌ですが、自分が何のために歩いているかわからなくなるという感覚が旅人の体感としてとてもリアル。「はつとしてわれに返れば」という口語の調子も、ふつと緊張が解けた感じが出ていて効果的です。

さて、若き牧水からどのような現代へのメッセージを読みとることができるか。私は、自分がどこから来てどこへ向かうのか、という問い合わせに対して、牧水の歌や生き方から学ぶべきものがあるような気がします。両親、あるいは故郷の風土や伝承を自身のルーツとして歌に落とし込んでいった牧水。そしてまた、「あくがれ」の精神から、みずからの行くべき先を求めつづけたこと。そこには、自分がどこから来てどこへ向かうのかという意識が働いていたのではないか。

私の場合だと、自分の好きな歌人の作風がどのように確立されたか辿っていくなかで、戦後短歌や前衛短歌に目を配ることがあり、翻って、その時代の歌と自分たちのころの歌とのつながりを考えることができます。また今年、戦後の短歌同人誌「灰皿」を取り上げ

て評論を書きましたが、「灰皿」の提起する「戦前感覚の復活」から、二〇二三年現在の戦前感覚に思いをはせることができました。自分たちはどういう道を辿り、これからどう進むのか。ときに過去のことを探りながら考えていくことは、とても有意義なことです。牧水の歌や生き方は、そのことを考えるうえで示唆に富むべきもののように思います。

このメッセージを現代に汲み取りつつ、もう一つ胸にとめておきたいのが、若き牧水が当時自分の生涯をどのように捉えていたかということ。第三歌集『別離』の自序には「そして丁度昨年は人生の半ばといふ二十五歳であつた」とあり、同じく現在二十五歳の私からみて、この言葉は重く響いてきます。人生の半ばを生きている……平均寿命がいまよりずっと短い時代にあって、牧水は限られたいまを生きようとしていたということを、牧水の歌を読むときには念頭に置きたく思います。

狩峰 隆希 第6回牧水・短歌甲子園優勝。牧水・短歌甲子園 OBOG 会「みなと」副会長。  
宮崎市在住。短歌結社「まひる野」に所属する25歳の若手歌人。

令和5年9月、公開講座特別企画「若き牧水から現代へのメッセージ」より

登壇	歌人、若山牧水記念文学館館長	伊藤一彦氏
	宮崎大学教育学部教授	中村佳文氏
	歌人（宮崎市在住）	狩峰 隆希氏

## これからの企画展

ワクワク♡ ワクワク♡ ワクワク♡

企画	内 容	期間
牧水遺墨展示	冬春を詠んだ牧水遺墨を展示	1/4~
高森文夫直筆原稿展示	未刊直筆原稿集「嬌羞の歌」詩51篇を順次展示	継続中
第28回若山牧水賞	受賞者永田紅氏紹介、歴代受賞者歌集・直筆自選5首・直筆色紙	1/4~
牧水の食	牧水短歌、散文等から「食」に関する作品ほか	3/3~
牧水母校作品展	坪谷小学校、延岡高校、早稲田大学短歌会が詠んだ短歌ほか	2/1~

## 第11回 高森文夫を偲ぶ詩大会表彰式

若山牧水とともに日向市東郷町を故郷にもつ詩人高森文夫の功績を讃えて「高森文夫を偲ぶ詩大会」が創設され、日向市内小学4年生から6年生を対象に詩を募集しています。今年度は649作品の応募があり、入賞16名を表彰します。

表彰式 令和6年1月21日（日）※高森文夫生誕の日1月20日前後の休日に開催  
午前9時30分から  
会場 若山牧水記念文学館

## 牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

### 元日の明けやらぬ部屋に燈火つけただ坐りゐて心つまし

がんじつの あけやらぬへやに ともしつけ ただすわりいて こころつつまし

いちみち

昭和2年正月のうた。牧水は静岡県沼津市市道の自宅で静かな正月を迎えている。「昭和2年元旦」と題し19首を詠んでいる。

元日の明の静けさ聞ゆるは家の裏なる浜の白浪  
ふと見れば時計とまりをり元日のあかつきにして見れば可笑しき  
部屋出でてたち迎ふれば真ひがしの箱根の山ゆ昇る初日子  
濡縁の狭きに立ちてをろがむよわが四十三のけふの初日を  
森かけの路をゆきつつわが歳の四十三をおもふけふは元日